
一部50円です



クラス会にて

「小学校を卒業してからもうすぐ五十年、来年還暦を迎えるまでになった。みんなの話を聞いて、先生は少しも驚いたり意外だと思ったりはしていないと思う。今のみんなの姿は小学校の時に予想できた以上でも以下でもない。あのとき想像したように、みんなそれぞれに生きてきた」

昨年の夏、五年ぶりに開いたクラス会で土井君はこんなことを言った。確かに参加している20名の同級生はあの幼い時の面影を残して大人に

なっている。「なるほどなあ」と私は思った。

私はこの歳になっても、恩師・まつおかはんに出会えたことに幸運を感じながらも、出会わなかったらという思いが心に去来する。人との出会いには喜びと悲しみ、安堵と後悔がついて回る。もしあの時あの人に出会わなかったら、という思いが波のように繰り返すのは、それだけその人から強い影響を受けたり、深い恩恵に浴している裏返しだろう。

私の悩みは、小学五年生の時、先生から生徒会の役をするように言われたことから始まった。自己顕示欲の強い性格であったために、それからすっかり舞い上がってしまい、自分の能力を超えるようなものばかりに憧れ惚けるようになった。人は私のことを気にもとめていないのに、私は他人の評価を気にしすぎるあまり、自分の人生を見失わせたのではないか。まつおかはんとの出会いはそんなきっかけとなったのではないか、と思う反面、能力不足でアップアップしながらも夢を追いかけて今を生きられるのは、やっぱりまつおかはんのお陰ではないかと思ひ直すのである。

調子の良い時には、よい出会いだと思ひ。悪くなると、あの人に出会わなかったらよかったなどと思ひ癖が私にはある。この性格は小学生の時から変わらず今も残っている。まつおかはんは、私が小学生の時にすでに私の性格を見抜いた上で私を推薦したのだろうか。芥川だよりの「恩師・まつおかはん」の巻頭エッセイを見せた時に「よしあき君らしいわ」と言ってほめてくれた。先生は今も変わらずにある私の本質を、小学生の私から感じ取っていたのであろうか。

私が小学生の時、生徒会の役をしていなくても今とよく似た生き方をしていたと思えばいいのであって、先生に責任を転嫁したがる己が問題だと思った。私は「生まれる前から生きる運命が決まっている」と言う人をバカにしてきたが、小学校を卒業する頃にはおよそその子の人生が見て取れるのかもしれないと思うようになった。

「毎週、日曜日に教会へ礼拝に行きお祈りをします」。夫婦ともクリスチャンだと言うご婦人は、還暦を少し越えた年令だ。着物が好きで着たいと思うがなかなか機会がないらしい。さりとして着物を服に仕立するのにも気がとめると言われる。

あれやこれや話していて、「お客さんは、どんな死に方をしたいですか。いつ、どこで、どのような最後を迎えたいですか」と私は聞いた。

「そんなことは、考えた事ないわ。神様に祈るだけですから……」

「では病院で死にたいですか」

「延命治療なんかはいやよね。いろんな管を差し込まれるのはお断りよね」

「でも、一度病院にかかれば決められた治療コースで死ぬまで管理される事になるんじゃないですか」

「でも、それしかしようがないしね。簡単に死ねないし」

「私は、いつ、どこで、どのように死にたいのか計画したらと考えてます。死に方を決めれば、老後の苦しみは減りますから」

「あなたみたいな発想をする人はいないわね」と言っただけで帰られました。

まだまだ、爺捨て山の理想が理解されるのは遠いようだ。神や仏にすがっても解決できない。己が決めねばならない。

《ヒマラヤへの道 10》

ガラムツシユ峰 2

梵店主

パキスタン北部にある小さな街・ギルギットは岩山に囲まれた谷間にあった。森林と呼べるようなものはなく、乾ききった広い沙漠の谷に、水路が引かれたわずかばかりの緑の農地が点在し、そのまわりに樹木が茂っている風景であった。

この地域は中国、ロシア、アフガニスタンとの国境に近く軍事的に重要なところである。また中国との交易の要衝でもあった。街の人口は少なく、観光地化もされていなかった。生活物資は遠くラワルピンディーから運ばれていた。

ギルギット空港に着いた我々は、荷物と共にトラックでホテルまで行く事にするが、ホテルが決まっていなかったの同行のリエゾン・オフィサー（連絡将校）をお願いして宿を探した。

小さな街なので、ホテルも少なくて部屋数も少ない。我々は分かれて泊まることになった。よっちゃんも山猿が泊まるホテルは、8畳程度の部屋にベッドが二つあって天井には大きなプロペラのよな扇風機がけだるそうに回っている。奥にはトイレ・シャワー兼用のスペースと水の入った瓶が置かれているだけの簡素な造りであった。

ドアにカギもかからないような無用心なホテルであったが、一泊五百円と料金も安かった。まわりには飲食店らしき店が数軒ある程度で、目立った店などなかった。ホコリまみれの道端を男達が行き交っていた。女の姿はほとんど見かけない。

夕方、腹がへったのでホテルの隣の屋台風の食堂へ行き、周りの男達が食べているシシカバブーを注文する。幾種類もの香辛料を振りかけた羊肉を焼いたもので、唐辛子入りの辛いスープにつけて食べた。これが慣れてくると美味い。

我々貧乏隊にとって、出費のかさむ街からできるだけ早く離れたい。そんな訳で到着した次の日には、リエゾンをお願いしてジープ二台を都合してもらった。もちろん料金の交渉は難航する。契約はなかなか成立はしなかったが、最後は双方折れて翌日の早朝に出発出来そうになった。

軍の司令部にも挨拶に行く。万が一事故が起きれば助けてもらわなければならないからだ。

翌朝、隊の荷と我ら隊員四名とリエゾン一名を乗せた二台のジープはギルギットを出た。舗装されていない片側通行の道をとばす。運転は荒っぽいが、優れているだろう運転手のテクニクに我々は身を任せる以外ない。

路肩の土がぐずれ深い谷底に落ちる可能性がある狭い道でもとばすのである。よっちゃんはガタガタ道を進むジープの窓にしがみつき、恐怖で胸が押しつぶされそうになりながらも、金庫は手首にまいたベルトにしっかりとつないで、離さない。何があっても金だけは離すわけにはいかない。パキスタンに着いたときから片時も気を抜くことはなかった。

二日目によく車の轍が消え行き止まりのところまで着いた。地図をひろげて考えれば、ここは昔アレキサンダー大王が東方制圧の為に通ったダルコット峠に続く地点であった。川は氷河から融け出した灰色の水である。他に水場はなかった。

よっちゃんは空のポリタンクを取り出して灰色の水を汲んだ。しばらく置いておくと底に砂がたまり、透明度は多少よくなるが、いつまで経っても濁ったままだった。よっちゃんも試みに飲んでみる。腹痛を起すか心配であったが異常はなかった。他の者は煮沸してから飲んでいった。

ジープから荷を降ろして、ジープ代を計算して払った。現地のルビー札で間違わないように幾度も数えて払った。

その日は、そこでテントを張ることにした。はるか彼方にダルコット峠がかすんで見える広い谷間である。よっちゃんがぼんやりしていると、遠くにある老人で、頭を白布で覆い肩から布を巻きつけている。持ち物は杖と小さな銀製鍋一つ。彼を点として見た時からよっちゃんは好奇心の虜になった。巡礼だろうか、商人だろうか、どうしてこんな所を歩いているのか……。見はじめてから何時間も経たないうちによっちゃんに近づいて来た。笑顔で何処から来たかを身ぶり手振り老人に尋ねた。中国へ行って帰って来たらしい。商人と言うが商品らしきものは何も持っていない。

一日歩いて誰にも会うことがない草木が全く育たない荒涼とした赤茶けた岩ばかりが続く岩石沙漠。彼は休むことなく歩いて暫くの内に点のように小さくなり消えた。彼にとっては、この無人の大地は通い慣れた道なのかもしれない。この地から街までジープでも二日、歩いたら二十日では行けない。ここは地球の辺境の地と言える。



ダルコット村を見おろす。
アレキサンダー大王がこの地を通り、
インドへ遠征した。

しつこいようだが、森ノ宮の成人病センターって、ほんとに患者のための病院なのだろうか。私の友人は森ノ宮に近い、玉造に住んでいるのだが、「あそこは有名ですよ、待たして、待たして患者が死ぬって」。義兄が入院していたときだったから、その言葉を聞いて愕然とした。もちろん、姉にも義兄にも言わなかった。患者数が多過ぎるのだろう。建物

が古いから、エレベーターもなかなか来ない。先生も看護師さんも、車椅子の人も、点滴の台を押している患者さんも、付き添う家族も、だまってエレベーターを待っている。

橋下府知事が視察に来て、すでに建て替えが決まっているようだが、今日現在の患者にとつたら、多分、あの病院は「いまだき最低の病院ワースト10」に入ると思う。高速道路のそばで、患者や家族の心休まる空間はない。病室も狭くて、薄暗い印象だ。

「そんなにポロクソに言うなら、なぜ、その病院を選んだのだ」ということなのだが、義兄は「症例数が多いんだよ、治療費も安いしね」と言っていた。姉は、その義兄のお金を「死んだら、使われへんねんで。本人が使えたらええねん」と、本人の意思そつちのけで健康食品に注

ぎ込んでいるのだが。最先端医療や義兄だけの経験で、大病院をポロクソに言うなんて、どうかしているのかもしれない。現に義兄は生きている。けど、言いたい。

友達が網膜剥離で北野病院に入院して、何回か、お見舞に行つたのだが、なんとまあ近代的なのかと感心してしまった。何より全体のイメージが明るい。日の光りが入る設計と建物に使われている色のせいだと思うが、患者や家族の心をなごませてくれる雰囲気がある。相部屋でも、ベッドとベッドの間隔が広くて、プライバシーが守れる。廊下も明るくて、ホテルみたいだ。友達にそつと聞いてみた。「アンタ、コッて入院費とか高いのん?」。友達はげんそうに「いいや、絶対、高いつてことはないで」。北野も建て替えて、今のような病院になつたのだそうだが。

これを読んでいる人のなかには、病院や病気にことに詳しく「シロウトが、バカめ!」と怒っている人もいるかもしれない。肺ガンは成人病センター、眼科は北野。建物が古いとか、そういう問題ではないわい、と。

でも、病院って、ひよつとしたら、そこで死ぬわけですよ、人間が。その最期の場所が快適であれば、少しは少しは救われる。あの成人病センター

では、救われない。橋下府知事さん、急いで下さい。どうせ建て替えるなら一刻も早く。そして、高速道路沿いなんて、ダメですよ。患者さんやその家族のために駅から近いというのは必須だと思うけれど、せめて空気ぐらいマトモなところに。

もし、こういうことを、うっかりブログとやらで書いたりすると、いろんな人に叱られたり、文句言われたりするのだらうと思う。森ノ宮の成人病センターに訴えられるかもしれない。営業妨害で(?)。あるいは、「私の家族は北野病院に殺されました」というような内容の反論もあるかもしれない。

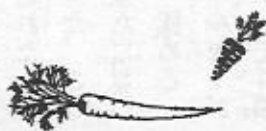
私は、そういうことのない「芥川だよ」が好きだ。何でも受けとめてもらえて、反論なんかされない。安らぐ。

で、義兄はどうなのかというと、薄黄色にはなつてはいるが、元気である。薄黄色? 誤字や変換間違いではない。手や顔など肌の色が薄い黄色なのだ。姉がニンジンジュースを毎日3回、330CCずつ飲ませているからだ。ミカンを大量に食べると手などが黄色っぽくなる。あれのニンジンバージョンだ。退院して

義兄が家にいる今、姉の仕事は大量のニンジン専用ジュースにかけて、レモンを絞って、朝昼晩に飲ませること。「1日、1000CCやねん、大変やで」。有機栽培のニンジン産地から取り寄

せているとかで、「だんだん北の方へ移動してんねん。春は茨城やつてんけど、今は主に東北や」。いまごろはもう北海道かもしれない。

姉は余分なお金は一銭たりとも使わない、家計簿の鬼だが、そういうことに費やすお金は絶対にケチらない。最近の姉の自慢は最高級のオリゴ糖をヨーグルトに入れて、義兄に食べさせていることで、電話するたびに、私に言う。「オリゴ糖もそんなじよそららんではアカンねん。100%、というヤツがあるねん。アンタもそれ食べや。100%やで。ちよつと高いけどな」としつこい。私の自慢はオリゴ糖などに頼らなくても生きていることなので、「ウ、ウン」となま返事をしておく。もし、私は自分がガンになつたら、姉には言わないで、こつそり治したい。真つ先に姉に電話して、「ニンジンジュース、持つて来てくれへん!」と叫ぶような気もするが。(AO)



死から生への問い 人生と何か

祖蔵 哲

三、死後の世界

「なぜこんな境遇に生まれてきたのか」「なぜこんなに苦勞をしなければならぬのか」等々の問いはたくさんあります。これはすべて自分の存在の根拠を知りたいと思うことなのです。アイデンティティつまり自己同一性、自分は何者なのかという根源的な問いです。これは、この問題の発生に自分の意思が関与できないからこそ悩むのです。なぜ人間に生まれ、この時この場所にいるのか。なぜ日本人であるのか。また、国籍が定かでない人は私とは何者かと考えるのです。私たちが悩んでいても解決されることがないものも多くがこのジャンルにあるといえます。

人間が知ることを求めるのは、何事にも意味づけをすることなしに生きられない存在になつてしまつていいるからかもしれません。なぜそうなつていいるのかは分かりませんが、だからこそこの不可解な生が答えなく終わることは全く理解できないということになるわけです。死んだらどうなるのかも「死の意味」のひとつです。人間の知りたいことは限りなく広が

つていきます。死後の世界も生の延長として思いをめぐらすことができま

す。もちろん誰もみられないのですから、想像という形であらわれます。それを具体化したものが葬儀という儀礼です。人のイメージは様々、民族でも宗教でもいろいろな形があります。仏教では死後の世界は極楽であり弥陀の光が燦然と輝いていると教えます。

しかし葬儀になるとまた違う形態をとります。私の家の宗教は浄土真宗です。この宗教の教えは本来非常に単純で人間はすべて死んだら仏になり誰でもすぐ浄土へ行くと教えます。他宗教では戒名や三途の川を渡る死装束があったりします。しかし浄土真宗でも、死後は本来すぐに仏様になつていいるのに冥福を祈るための四十九日の法要があり、それを過ぎると喪があげるといった様々な他の宗教や土着民族の言い伝えなどが混合した形態をとつて現在もあります。

キリスト教ではもともと人間はアダムとイブ以来、罪を犯してきたものであるから死後もなにも変わらないと考えます。ただ神に祈り復活の日を待つのみと教えます。

ということでは死後の世界観はさまざまであり、もちろん何もないと考えている人も多くいるわけです。天国や地獄という考えはどちらかかという道德

的なもので、悪いことをしていろとくなくないよという論しのほうが大きいようです。このように死後の世界観の多くは宗教の影響にあります。

四、宗教の発生

ではその宗教はどのようにして出来たのだろうか。宗教というものは世の中にある事象で人間が説明できない理不尽なものを説明するために人が作り出したものです。そしてそれは証明する必要がありません。なぜならその前に信じるということが第一義としていわれるからです。

古来、未文明の時代、天変地異や病気が及ばないようなものに対して納得できる説明が求められたわけです。それは前にもいったように人間というものには宿命として知ることを欲する動物だからです。人間に備わつていいる理性といわれるもののうち、結果として起こることには必ず「原因」があるという

ことは、一種の本能的な脅迫観念かもしれませんが、人間以外の動物は起こつたことに対して原因なんて考えませんが人間は何故かと考えるのです。そして自然のなかから森の精や動物の化身を想像し、さまざまな目に見えないものを作り出すことによつてそれらの原因を説明していったのです。

携帯エッセイ 2

「耳順」 (みみしたがう)

昨年、還暦を迎えた。残された余生は心穏やかに暮らそうと思った。これまででは突つ張つて生きて来た。当然、揉め事は尽きない。しかし、揉めると疲れる。年を取るとそのエネルギーが出てこない。そこで「六十にして耳順う」(孔子)ように心掛けることにした。具体的には会話は「はい」と肯定で受ける。「そりゃないだろう」と思つても言葉をグツと飲み込むことにした。その効果は靦面。身近かな例では夫婦喧嘩が減つた。

「お風呂先に入つて下さい」と妻が言うのと「はい」とうける。それで平穩な時が流れる。

今までならそうはいかない。こんな具合だ。(私が居間でテレビを見ている)

妻「お風呂先に入つて下さい」私「いまメシ食つたばかりだし、30分ほどして」

妻「先に入つて下さい。いつまでも片付きませんか」私「そしたらお前が先に入つたらいいだろう。シャワーなんだから。順番を気にしないでいい」

妻「最後に火種を消さなければなりませんので」

私「それぐらい俺がやるよ」

妻「信用できません。今までに何回も忘れてるんですから」

私「忘れたとしてもガスは自動的に止まるようになってる。お前があんまりうるさいので風呂のメーカーに問い合わせた」

妻「それでも豆ランプは付いたままです」

私「それぐらい、いいじゃないか。電気代もほとんど掛からないし」

妻「それでも消さないと落ち着かないんです」

(テレビから目を離す)

私「つべこべ言うな。家で寛ぐことも出来ない。外で働いて疲れて帰って来てんだぞお！ だいたいなあ、俺はシャワーなんか好きじゃないんだ。水道代が要るだの、ガス代が要るだの、お前がケチ臭いことを言うから我慢してるんだ！ケチケチし過ぎだ。俺はちやんと稼いでいるだろう」

妻「老後に備えてお金はいくらあっても足りません」

私「心配し過ぎだ。なんとかなる。なんとかならなきゃ死んだらええ！」

後は一気に罵り合いになる。私が「別かれよう」というところまで行くこともあったし、妻が物を投げて来たこともあった。

全国関白協会という団体が夫婦円満

の秘訣はお互いに、①ありがとう、②ごめん、③愛してる、の三つの言葉を言い合うことだと提言している。私にそれに「はい」を加えたい。(龍)

高槻からの眺望 6

数島 旭

高槻は「中核市」として国に指定されている。中核市は、日本の大都市制度の中で、政令指定都市に次ぐ位置にあり、大阪では他に東大阪市が指定されている。でも、中核市が何であるのか、あまり一般の人は知らないのではないだろうか？ 政令指定都市ならば、私も何となく、「予算交渉など国と直接協議できる都市」ぐらいのイメージは持っているが、中核市となると、その定義はまったくわからない。勉強不足だと叱られるかも知れない。ウイキペディアで調べると、次のような指定要件が書かれていた。「法定人口が30万人以上であること。所属する都道府県の議会と、その市自身の市議会の議決を経て、総務大臣へ指定を申請する」

関する幅広い権限を委譲されているのに対して、中核市は福祉に関することについての権限が委譲されている：という感じだ。現在、全国で40の市が中核市に指定されている。たった40である。その数からすると、高槻市は、立派な市なのだろうと思う。ただ、水を差すようにで恐縮だが、このような大都市制度に問題があることは、多くの日本人の共通認識になっているのではないだろうか？ その典型が大阪府と大阪市についての二重行政の問題である。大阪府が政令指定都市であることが問題の根源にある。私が仕事上、かつて関わった大阪市の起業家支援機関と同様のものが大阪府にもあった。それどころか、似たようなものが、国の出先機関として別に二つもある。管轄省庁が異なるので、二つもあるのだ。また民間の経済団体も同じようなことをしている。二重どころか、三重、四重行政だ。さらに、ある福祉団体も、ほぼ同じものが、大阪市にも大阪府にもある。この福祉団体は距離的にも極めて近かった。道を一本挟んで、向かい同士の位置にあった。今あげた例は、私が仕事として直接関わったものについてだけである。だから、私の関わっていない分野まで広く想像すると、数えきれないくらいあるのだろう。それぞれにビルがあ

り、それぞれに人がいる。大きなコストがかかっている。そして、本当のところ、その恩恵を受けている市民や府民は何%ぐらい居るのだろうか。多くないように思う。失礼ながら、そこで働いている人々、そこを管轄している役所の人々が一番恩恵を受けていると言えるのではないだろうか。大阪がこのような無駄を生じせしめる地域であることは、周知のことであったであろうに、数年前、そこにまた堺市が政令指定都市として指定された。堺市は大阪府の中に、独立した都市国家が二つもある。行政コストが問題になってこの時代に、また政令指定都市や中核市になろうとすると、コストが増えるのだろうか。疑問は尽きない。高槻市の方々には、申し訳ない見解だが、こんな大都市制度は早くやめてもらいたいと思う。

俳句

菜女

- 熱中症おそれて行かぬ墓参り
- 盆参り携帯片手に急ぐ僧
- 炎天下干蟻並ぶや答志島
- サザエ売り香も声も響きよし
- 夏祭り浴衣着せると約束す

「菅さん、小沢さんもケンカやめて、しつかりしてや！」

明石 幸次郎

先日行われた参議院選は、民主党が改選議席数の確保と言う自らの予想に反して、10議席も減りました。この結果をマスコミは民主党の惨敗とか、大敗、自民党の復調と、みんなの党の躍進などで、参議院で過半数割れたため、与党民主党の国会運営が難航するだろうと論評しています。

確かに議席を改選議員の2割近くを減らしたことが、去年9月から政権を担当した民主党に対する国民のある種のマイナス評価ではあります。これは、何のことはない前回の総選挙で民主党を支持した無党派層の一部が、公務員制度改革で無駄を省く政策を一点主義主張して、「カテゴリーキラー」とも言える特徴を出したみんなの党に票が流れ、民主党の減った10議席をまるまる奪うことに繋がったことです。

元々は中央省庁の天下りを廃止し、その天下りの受け皿になっている外郭団体を統廃合し、抜本的な公務員制度改革を行い無駄を省くと公約して、国民の期待の中、政権を担当したはずの民主党でしたが、眼に見える形での成果を上げないまま、頭の良い役人の強い抵抗で中

途半端にしたままで、改革を先延ばしにして、それを隠す為か事業仕分けという舞台を作り、蓮舫議員というスターを持ってきて、ショーを演じさせて、抵抗勢力の役人いじめと税金の無駄を省いているという演技をしてお茶を濁しています。こんな一見華やか演技ななどは、大阪府の橋下知事の真に迫る演技と比べれば、役者の違いを感じさせ、舞台が終われば、観客が何の印象も残しません。橋下さんは、知事に就任すると直ぐに大見得を切って、府の財政再建のために府の職員の給与カットと知事、議員の歳費のカットを強い抵抗の中で、強い信念とリーダーシップを持って一気呵成にやり、かつ無駄な府の事業を思い切って廃止して、その結果が、今や府の会計決算を二年連続で黒字にして眼に見える成果として出しています。

又、民主党の敗北は、890兆を超す国と地方の借金返済のため10%程度の消費税を検討していくと言う争点に菅首相が挙げたことが原因とも言われています。それは本質ではないと思います。我々国民も、いつかは何らかの形で増税といった方法で歳入を増やさないと、歳出が増えるだけの国の財政事情は永續しきない位は理解しています。消費税増を掲げたから、それだけ単純に拒否した訳ではないと思

ます。本質は出し方のタイミングとプロセス（色々と歳出を削減に努力した過程）が無い事と前首相と前大物幹事長が消費税は4年間上げない、それよりも無駄を省く事が先決であると大見得を切ったことに対する公約責任は当然、菅首相も担わなくてはならないはずであると思っただけです。

いくら、選挙の争点を鳩山失政の沖繩基地問題と小鳩コンビの政治と金の問題から逸らす為とは言いがたが、ライバル自民党が消費税10%を掲げたから、国民の反対が薄まる

といった菅さんの小ずるさを、国民も菅さんの奥さんも見抜いていたから自らの予測がはずれたという事でしょう。選いずれにしても、国民は民主党にも暫くは政権を担当させて少しでも国民と為の政策実現に向けて、政治的安定を望んでいます。一部では、今秋の民主党党首選で、静かにしてと言われた小沢さんが巻き返しを図り、民主党内での権力闘争を仕掛け政局が混乱するとまで早くも予測しているマスコミもあります

が、これはマスコミが煽り立てて、政治をショー化させようとしているだけで、世論でもないし、それをやるならば、民主党は当然国民の支持は今度こそ得られませんか。国民から

見れば、そんな無駄な権力闘争を本当に大物政治家の小沢さんが仕掛けるのであれば、世論もマスコミもそれをさせないようにしなければなりません。

考えてみれば、政権交代可能な政治システムを目指して小選挙区制を導入した政治改革から16年が経ちます。その間、この国はGDP世界2位の地位から今や16位までに転落したように国民生活、国力も弱体化して、先行きの見えない時代に陥っています。その責任の一端は政界の「権力争い」に明け暮れた政治にあったと思います。しかも、この動きの多くは自民党の当時の経世会の権力争いに敗れた小沢さんが私的怨念から仕掛けて来たものでしょう。

この人の政治信条は「国民の生活第一」を掲げています。民主党の公約の高速道路無料化、子供手当、農家個人補償、税金の無駄の削減もこの人の生活第一からの発想なのでしょうが、未だこの政策の完全なる実現はしないまま、自分が疎外されたからと言って16年前の怨念を思い出し、党内の権力争いを仕掛けるのは、大物政治家と言われる人のやることではないです。本当にこの人こそ大人になって、止めにして貰いたいものです。小沢さんの奥さんが菅さんの奥さんに負けず「アンタ、エエ加減にケンカばかりせんと、ちよつとは、私ら国民の為に真面目に働いてんか！政治は国民の生活第一主義や言ったんわ、どこの誰や！」と大物の旦那に向かって一喝して貰いたいものです。余談ですが、この奥さんは田中角栄さんと仲良くして会社の規模を大きくしたと言われている新潟の建設会社社長の娘さんです。

上原むつえ

南国市に帰った私は、友人が寺の先代から寺の改築費用として160万預かっている事を知らされたが、こんな金額では何も出来ないと思った。

彼女が頼んだ大工は農機具を入れるような物置小屋ばかりを建てていた大工であった。その大工がこればかりの金では何も出来ないといわめいていると人が知らせて来た。私は何が何やら判らんようになってきて「私が100万寄付するから東京へ帰らせてくれ」と言うのと、檀家総代十一名が来て「私ら金をこれ以上出す事は出来んが、あなたの思うように寺を改修してくれんか」と言う。私は止むを得ず東京へ帰ることを止めて寺の事を考えた。

この寺は40年も無住職であった為に荒れに荒れている。一から建て替えねばならない。その為には信用できる棟梁がいると思っていた。すると、雨戸の修理に来た七十歳を越えた大工が「私なら、あなたの希望する大工を集める事ができるから、やらせてくれ」と頼んできた。その棟梁が集めてきた大工十名の内二名は寝食を忘れて仕事をしたが、他の大工はいい加減なのが多かった。

棟梁は、寺の庫裏を建てる外装の費用に五千万かかると言うので、私は静岡の父に電話して送金してくれるようにお願いした。父は熱心な身延山の信徒であったので、詳しい訳も聞かずに次の日に住友銀行の支店に入金してくれた。この建築に三年かかり。その内装に新たに四千万、八年の月日を費やした。この時も父は気持ちよく金を送金してくれた。

父から、「上原家が傾くような事だけはするなよ。家やお前が傷つくようなこともするなよ」と言われた覚えはあるが、私に小言らしいことは言わなかった。

ある時、十一体の仏像が欲しくなり仏檀家総代に内緒で仏師にお願いすると、思っていたより二ヶ月間ぐらい早く出来上がった。さつそく代金千八百万を送れと催促がきた。私はこの知らせを受けたとき、目が回るメニエル病にかかって困り果てていた。父に自分の事で無心することは出来ない。しかし、私う金はない。そんな思いで床に臥せていた。

そんなとき見知らぬ尼層が私を訪ねてきた。その尼層は私より年上で長浜寺の住職だという。あなたが仏像のことで困っておられるので、仏像の代金千八百万は私が工面しますと言う。やはり此の世は見捨てたもんじやないと

私は喜んだ。

後日、長浜寺を訪ねた。大きなその寺の片隅に小さな物置小屋のような建物が、住職が寝泊りする処だと寺の檀家の人説明してくれた。どう頼んでも住職は本堂に寝泊りしてくれないから困るんですと付け加えた。後年、その尼層は私に、あなたに功德を積んだお陰で物置小屋から出て本堂で寝られるようになったと語った。

寺の改築を始めてから、あつと言う間に十一年が過ぎた。これからが大変であった。いよいよ本堂の建築である。いやその前に、三百軒の檀家が入れる2階建て百五十坪の建物を建てた。これにも億をこえる金が必要だったが、本堂に比べれば知れていた。

百坪の本堂を建てるには大変な金がかかった。柱一本でも選りすぐりの通し柱なので高い。「坊主一生、寺末代」と知り合いの上人は教えてくれたが、寺の建築には普通の家屋の十倍からの金と時間がかかる。そのうえ最高の資材をつぎ込んで普請するから、永くもつのである。

次は中に安置する仏さんである。13年かかって修理に出していた十一体の仏さんが帰って来た。2千万ほどかかった。

一応の普請が終ると、落慶供養を執り行わなければならない。これにも金がか

かった。

私の父は莫大な費用をこの寺の普請のために寄付してくれた。このことは一部の檀家総代が知っているだけで一般の檀家は知らない。私は、僅か二十万の寺の金を横領した嫌疑をかけられ、寺を追われる羽目になるのである。仏にまつわることをしていると奇跡か夢かと思うぐらい不思議な出会い、出来事がある。金というものは、必要なきにまわってくるものである。

十数年間、寺の改築に毎日奉仕で来てくれる五十人の昼飯を毎日作った。弁当を買って食べてもらったらいいと言う友人の住職に私は「弁当では、人は来てくれない。東京から来た変わった女の人が美味しい飯を食わしてくれると思うから多くの人が毎日毎日来てくれる」と言って、朝三時に起きて市場に買出しに行った。すると、檀家の仲買人か毎日食材をたたくてくれた。米は檀家衆がもて来てくれたので、うまい料理を食べてもらおうと、私は一所懸命に働いた。

ある上人から「あなたの後ろに白髪の老人が見えるは誰じゃ」と言われたことがある。静岡の叔父に聞くと「その風貌は次郎長じゃ。おまえが幼い頃まで家で寝泊りしていたからなあ」という。男っぽい性格はそのためだったのか。

愛語

或る日、

「親父、あまり年をとってから無理するとあかんで、もう休んどき」

などと、我が子から声をかけられると、

「年寄り扱いされる程もうろくしとらんぞ」

と返す。

そう言いながらも、その顔は喜びをたたえ、心中は無上の幸福にひたっているのだ。

子どもからやさしくいたわられるほど、親としての幸せを感じるもの。

これは親子に限らず、友達でも知人でも、他人から真心をもって親切に言われると、嬉しいものであり心楽しいものである。

愛語というのは、誰に対しても可愛い赤ちゃんを見ているような気持ちで話す言葉のことをいうけれど、それがお世辞であるとわかっていても、悪い気がしないものである。

ボケがくる

八十歳をとくに過ぎてから、友達の話報やら、「どうも此の頃ボケが来ているようだ」という疑いやら、心配やらが耳に入るようになった。疑いや心配のうちはまだいい。その

うち決定的な事実を知らされることになる。

今日は人の身、明日は我が身。という心境である。

身内が側にいる人はまだしも、一人暮らしは、そうはいかない。

「あの人、此の頃、おかしいなあ、と思つたら、すぐ一言いつてね」

と頼んであつても、その相手がボケてしまつたらどうなる…。

一寸先も闇である。どう考えても辻褄が合わない話をする。それをつつ走る。

ちよつとおかしい。ボケが来たのかな。あれはあの人性格よ。イヤ、ひどいよ。

やつぱり、それなりにボケて来ているようだ。性格なのか、ボケなのか。横着心なのか。判断に悩まなければならぬ事だらけである。

老いの影は音もなく忍び寄る

ピーポーの音が聞こえるたびに、ドキッとすする。

下手な医者や、急病人の知らせに駆け出し、はずみで隣の子どもを蹴飛ばしてしまつた。

「どうしてくれる！」と母親が怒る。

聞いていた人が「足で蹴られた位は、堪忍しておき。」

この人の手にかかったら命がないよ」という小話がある。聞いて笑えるのも、そんなヤブ医者は現実にいないと思えばこそ、心おきなく笑うことが出来るのだ。

私も、少し風邪気味のようなといえば、医者は、花粉症かも、と言つたきり異常なく降圧剤だけくれたけれど、元気なバアさん心配ないわ。アハハと笑い会つたのだが。

その笑い声には、我ながらヤケクソ投げやりの響きがあつたと思う。

携帯型熱中症計を片手に、常に変動するから、問題にしないことだ。一喜一憂しては、出る元気も引つ込んでしまふ。

編集後記

おかげさまで四十八号を発行出来ました。投稿していただいている方、読んでいただいている多くの方々、ほんとうにありがとうございます。

いつも発行する時に、言いようのない喜びが沸いてきます。同時に、こんな大それた事をしていいのかという怖れも感じます。

編集者の先輩に聞くと、彼も同じような怖れを感じるそうです。幾度発行していてもその都度、こんな紙面でもいいのか。こんな雑誌を出していいのだろうか。と自問するそうです。

本誌の編集方針は、人の生き様の凄さ面白さを身近な人から掘り起こしていくことです。百人百様の人生がある。比較しようのない、その人だけの思いや生きてきた人生がある。皆さんの協力を得て、その辺のところを活字にしたいと思つていきます。今後ともよろしく願ひします。

『人気のデザイン』①

ラグラン袖のワンピース

*

ゆったり袖が楽チンで幅広スタンドの衿がお洒落なデザインで好評



夏休みのお知らせ

8月14、15、23~29日
着物から服を仕立てます

菟~ほん~

